

第6章

『流謫の地に生まれて』

(*Born in Exile*, 1892)



Portrait of Gissing by Russell & Sons (1895)

## 作品の梗概

薬剤師の資格を持ちながら自らの理想家肌気質を捨てられず、わずかな遺産相続を機会に勤務先の病院を退職し、慣れない農作業から来る過労で結果的に命を落とすことになるニコラス・ピーク (Nicholas Peak) は、その長男に、かつて彼が愛読した『政治的正義』(An Enquiry concerning the Principles of Political Justice, 1793)の著者であり、無神論を奉ずる自由思想家ウィリアム・ゴドウィン (1756-1836) に因んだ名前を付けていた。父の死後、叔母の援助によって辛うじて学校に通っていたゴドウィン・ピーク (Godwin Peak) は、一時はその理科系の知識を生かせる地元の化学工場に勤務しつつ勉強に励むという二重生活を送るが、猛勉強の結果、ジョーブ・ホワイトロー准男爵 (Sir Job Whitelaw) 奨学金試験に合格し、自らの出自の低さを恥じる一方でその優れた知性を密かに誇りつつ、中部地方に誉れも高いホワイトロー校に学ぶ身となる。

おりしも年度末の成績優秀者表彰の日、いくつかの科目で優等賞を手にしたにもかかわらず、どこか所在なげなふうで歩く彼と友人ジョン・エリカ (John Earwaker) に話しかける者がいた。ゴドウィンの叔父、アンドリュー・ピーク (Andrew Peak) である。ロンドン東部で喫茶店を営むこの商人は、甥のつてを頼ってこの地に軽食堂を開こうという魂胆なのであった。誇るべき家柄を持たず、唯一成績の良さだけが自信の拠り所であるような、劣等感と傲慢さをないまぜに抱え込んだこの青年にとって、これは耐えがたい屈辱であった。親戚に卑しい商店主がいることが、ゴドウィンのかの地での評判にどのような影響を及ぼすかを考えようともしないこの鈍感な叔父の申し出は、結果的にこの青年のホワイトロー校中退、ロンドンへの上京と鉦山学校への入学、化学工場への就職へと繋がることになる。

かつて働いていた地元の工場主の甥であるクリスチャン・モクシー (Christian Moxey) を頼りに上京して10年、今ではロザハイズ (Rotherhithe) の工場で働くゴドウィンは、会社勤めの傍ら、無神論を標榜する雑誌に幾度か投稿したり、進化論を含む科学の研究を続けていた。ロンドンの週刊新聞

『ウィークリー・ポスト』に籍を置くジャーナリストとなっているエリカと再会した彼は、ある夜、財産を得て勤めを辞し、大陸旅行の後にロンドンに戻ったクリスチャン・モクシーとその妹マーセラ (Marcella) の住む家へ招かれ、そこで、ホワイトロー校時代のライヴァルでもあるブルーノ・チルヴァース (Bruno Chilvers) の噂を聞く。生まれも育ちも容姿にも恵まれたブルーノが英国国教会の若きホープとして世間の口の上ることに対する彼の強烈な対抗意識は、かねてより彼の頭にあつたある考えを実行させることになる。それは、聖書の記述と矛盾するような科学的発見が相次ぎ、チャールズ・ダーウィンの進化論への批判が影を潜め始めた 19 世紀末にイギリス宗教界に訪れつつあつた護教的態度に一撃を加えることであつた。すなわち、聖書の啓示と科学を調和させると称する書物の持つ偽善性を暴くことである。エリカにその内容について話し、「新ソフィスト論」(“The New Sophistry”) という題で発表したい旨を伝えた彼は、会社での配置転換を機に休暇を取ることに決め、完成した論文を匿名で『クリティカル』(*The Critical*) 誌に投稿してくれるよう手紙で依頼する。

ゴドウィンが向かつたのは、その近郊で地質学上の重要な発見があつたためにかねてより興味を抱いていたコーンウォール地方の中心都市エクセター (Exeter) であつた。有名な大聖堂を眺めた彼の目に飛び込んできたのは、かつての同級生、バックランド・ウォリコム (Buckland Warricombe) の妹シドウェル (Sidwell) の姿である。さらに翌日バックランド本人に偶然出会い、家へ招待されるに及んで、彼のシドウェルへの関心は高まってゆく。かつてエリカと結婚談義に及んだおり、新しい女は不愉快だ、結婚するなら自分よりも血筋のよい女を選ぶと口外して憚らなかつたゴドウィンにとって、この地方の名士マーティン (Martin) ・ウォリコム氏の長女は願つてもない相手であるように思われた。

ウォリコム家での談笑中、エクセター大聖堂で行われた説教の一節について見事な注釈をして見せたゴドウィンの様子に、ホワイトロー校在籍当時の知性とは異なるものを見た気がするバックランドは、旧友の将来の計画を尋ねる。答えは、会社を退職して、聖職者になるための勉強を始めたい、というものであつた。これまで幾度か学業の完成を阻まれて来た彼にとって、どこかできちんと大学卒業資格を取らなければという想いは常に頭の片隅にあつたのだが、シドウェルとの出会いの後に咄嗟に口にした言葉が、かつて最も忌み嫌つていた牧師になるということだったのである。自らの偽善性に愕然としつつも、ゴドウィンは覚悟を決め、「新ソフィスト論」の掲載通知を

受け取っても、匿名のまま掲載すること、本当の筆者が誰であるか口外しないことをエリカに依頼するのであった。その後、彼の本心を確かめに来たバックランドに決心が変わらぬこと、退職後はデヴォンシャーに滞在して勉強を続ける計画であることなどを告げ、今後とも友人として遇してほしい旨を訴える。この返答に、身分の低い者が自分たちの領域に侵犯しようとしているらしいことを本能的に察知したバックランドは、この後、常にゴドウィンに警戒の目を光らせるようになった。

やがて、自身もまた玄人はだしの地質学者であるがゆえに聖書の記述と科学的事実との間の齟齬に悩むマーティン氏の良き話し相手として、ウォリコム家への出入りを許されたゴドウィンは、自らの本心を隠し、不可知論者の限界を責め、聖書の矛盾を証明する科学的根拠があるにもかかわらず、今なおキリスト教は信じるに足るものであるという主張を繰り返す。自分が匿名で発表した『クリティカル』誌の論文のことにマーティン氏が触れても、それを科学者からの偏狭な反論であると言い繕い、決してぼろを出さぬように努めるのであった。しかしながら、ゴドウィンが父や妹に与える影響を好ましく思わないバックランドは、一家をロンドンに呼び寄せせることでこの偽神学生に距離をおこうと画策し始め、却ってシドウェルとゴドウィンの仲を進展させる結果を招くことになる。自分の内にある愚昧な大衆や都会への嫌悪を包み隠さず語る兄の友人の姿に真摯なものを見た彼女は、この繊細な魂の力になりたいとさえ思うようになったのであった。

一方、ロンドンではエリカやクリスチャンとマーセラの兄妹が、ゴドウィンからの消息が絶えたことを案じていた。特にマーセラは、ゴドウィンの中に自分と似た資質を見出し、いつしか強く彼に惹かれ始めていた。思いつめた彼女はゴドウィンの故郷トワイブリッジ (Twybridge) へ行き、偽名を使って彼の母親から住所を聞き出すという挙にでる。かつての同級生アガサ・ウォルワース (Agatha Walworth) の招待に乗ったふりをしてデヴォンシャーへ行くことにした彼女は、シドウェルの友人でもあるシルヴィア・ムアハウス (Sylvia Moorhouse) 宅に滞在中、訪ねてきたゴドウィンと再会を果たす。自分の過去を暴かれることを恐れた彼は彼女に口止めすべく密かに会い、自分が愛されていることを確信しつつ、しかし、あくまでも冷静に別れる。また、マーセラも兄にはゴドウィンの消息を告げないと約束する。

ところがロンドンでは、バックランドが「新ソフィスト論」の真の著者を偶然にも知ってしまった。ゴドウィンがエリカに口止めを頼む前に、この匿名論文が誰の手によるものか、モクシー兄妹だけでなく、おしゃべりの

ジャーナリスト、マルキン (Malkin) の知るところとなっていたからである。モクシー兄妹宅に招待されたバックランドは、そこに居合わせたマルキンの口からこの過激論文の執筆者の名前を聞き、全てを理解して立ち去る。ゴドウィンが自分の友情を踏みにじり、父や妹を騙していたことをいち早く家族に伝えるためであった。

その頃までにゴドウィンがエクセターで知り合った英国国教会関係者と言えばリリーホワイト氏 (Mr Lilywhite) という穏やかな地方都市の牧師くらいのものであった。ところがある日、彼はかつてのライヴァルであるブルーノ牧師の来訪を受ける。学生時代と同じように相変わらず耳障りで表面的なおしゃべりに興じるこの元同級生を観察しながら、ゴドウィンは世知に長け、出世欲に燃えるこの牧師が目下画策しているのは、自分と同様、できるだけ有利な相手との結婚であることを察する。その正体を見たと感じた彼は、英国国教会も恐れるに足りぬという確信を抱くに至った。シドウェルがロンドンから戻る頃であることを思い出してウォリコム家へ向かう彼は、まさしく彼女とその母親の乗った馬車に出くわし、来訪の許可を得る。いよいよ彼女に求婚するときが来たのだ。自らの出自の低さ、せいぜい田舎の牧師にしかかなれないであろうこと、それもあと数年は先のことになることなど、彼は慎重に言葉を選びながら彼女の返事を待つ。ついに彼女の口から「いつの日にか」という囁きが漏れるのを確認して、ゴドウィンはウォリコム家を辞した。

その直後に兄から知らされた事実シドウェルは動揺するが、どうしてもゴドウィンの口から釈明を聞きたいと願ひ、密かに手紙を送り、二人きりで会うことになる。しかし、全てが明るみに出てしまったことを悟った彼の口からは、自らの偽善をわびる言葉と彼女に対する未練めいた繰り返しか聞けなかった。彼女の兄が真相を知ったのがモクシー兄妹の家であったことを聞いたゴドウィンは、マーセラと密かに会って口止めをしたことなどをシドウェルに打ち明けるが、これは彼女の心に新たな疑惑の種を残すことになった。もう会えないだろうが、手紙のやり取りだけはしたいと告げる彼女に向かって、一縷の望みを感じたゴドウィンは、誠心誠意をこめて別れの言葉を口にする。それは、彼もまた彼女のことを心から愛していたことを伝えるには遅すぎる言葉であった。

エクセターを離れたゴドウィンはエリカのもとを訪ねてこれまでの経緯を全て話す。ロンドンでは友人たちの身にも変化が起こりつつあった。クリスチャンは長年慕い続けていた女性が未亡人になったのを契機に正式に求婚するが、相手にはそのような気持ちがまったくないことを知らされて迷妄から

竟め、今は医者になっている従姉妹のジャネットに理想の配偶者像を見ている。エリカは新聞社をやめ、週刊評論誌の文芸部長に収まっている。マルキンは後見人を務めている娘ベラ (Bella) の母親であるジェイコックス夫人 (Mrs Jacox) に求婚され、慌てて弟夫婦と共にニュージーランドへ出奔する。彼らの境遇について知らされたゴドウィンが次に会ったのはマーセラであった。彼女は、自分と同質の「生きにくさ」を感じているであろう彼に対するせめてもの友情の証に、自分の財産を受け取って、晴れて勤め人の身の上から自由になってほしいと懇願するが、ゴドウィンは受け取る理由がないと申し出を辞退する。バックランドも結婚を決意するが、一人シドウェルだけは、シルヴィアに青春の終わりを自覚したという内容の手紙を送るのであった。

3年後、マーセラが事故にあった後にこの世を去り、年額 800 ポンドに相当する彼女の遺産をゴドウィンに贈りたい旨をクリスチャンが伝えにくる。生前の彼女の自分に対する気持ちを知っていながら、結局それを受け入れられなかった彼も、今度ばかりは彼女の金を受け取らざるを得ない。実はその金は、彼にシドウェルへの正式な求婚を可能にする金額ではあった。自分への思いのこもった金を使って、他の女に求婚できるような男であるかどうかを試されているような気分になりながらシドウェルへ事情説明の手紙を書くゴドウィンではあったが、結局彼女からの前向きな返事は得られなかった。シルヴィアとの対話を通してシドウェルは、結局自分は家族を捨てられない人間であるという自己認識に達していたのである。

エリカとの最後の対面の後、ゴドウィンは長年の夢だった大陸旅行へと旅立つ。それと入れ替わるようにして帰国してきたマルキンは、今度こそベラ・ジェイコックスと結婚し、これもまた新婚旅行に旅立つことになる。ローマで投函されたマルキンからの葉書の中にゴドウィンを見かけたという一文を発見したエリカのもとに、当のゴドウィンからも葉書が届く。ローマでマラリア熱に感染して入院していたというのであった。次はウィーンへ向かう予定だという彼の言葉どおり、次に届いた書簡の消印はウィーンのものであったが、宛名は彼の手によるものではなかった。それはゴドウィンが最後に投宿したウィーンのホテルの支配人からのもので、ピーク氏はホテルに到着したその日のうちに危篤状態に陥り、翌日死亡したとのこと。終生、自分の居場所を得られずに客死した旧友の運命を思い、エリカは嘆じるのであった。「死ぬときまで流浪の身の上か！かわいそうに！」

## 汝再び故郷に帰れず ——突然変異か形質遺伝か——

### 第1節 分身を描くということ

1892年5月20日、ギッシングはドイツにいる友人エドゥアルト・ベルツにこう書き送っている。

In judging the tendency of “Born in Exile,” it is probable that you have been misled by the fact that the character of Godwin Peak is obviously, in a great degree, sympathetic to the author. But you will not find that Peak’s tone is to be henceforth mine—do not fear it [. . .]. Peak is myself—one phase of myself. I described him with gusto, but surely I did not, in depicting the other characters, take *his* point of view? [. . .] No, I hope to be more & more objective in my work; I hope to, & mean to. Already I have begun my new book, & herein you will see how I regard the pursuit of money & ease as it affects the mass of the London population; you will see, moreover, that I am very far from over-rating the moral worth, the value as individuals, of what we call the educated classes [. . .].

“Born in Exile” was a book I *had* to write. It is off my mind, & now I go on with a sense of relief. (*Letters* 5:36)

いささか長々とギッシングの手紙を引用したのには訳がある。未完の歴史小説『ヴェラニルダ』を除けば、ジョージ・メレディスの忠告に従って概ね自らの体験した英国社会の底辺近くを題材にすることが常だった作者にとって、この小説は特に自伝的傾向が濃厚な作品であった。そのことが発表当初から友人や批評家によっても指摘されており、彼としては敢えて作品と作者の距離などという言わずもがなのことを主張しなければならなかったのである。彼がここで認めているように、確かに主人公ゴドウィン・ピークと作者の間には共通点が多い。両者共に下層中流階級的な精神構造を終生持ち続けたこと、薬剤師だった父親に早くに死なれていること、不本意な形で高等教育を途中で断念していることなどといった伝記的な符合に加え、共に不可知論者であり、無知蒙昧な一般大衆に対して強烈な嫌悪を抱いていたこと、職

業にせよ住居にせよ、一箇所に定まることがなかったことなど、枚挙に暇がないほどにこの二人は似ている。そして、これは運命の皮肉ないはずと云うべきなのであろうが、外国で客死するところまでそっくりである。

このように自分に似た主人公が孤独な死を迎えるような小説を「書く必要があった」と述べる時、作者の念頭にあったのは「過去」との訣別であったであろうことは想像に難くない。オーエンズ・カレッジ (Owens College) 退学の一因となった最初の妻が6年にわたる別居生活の末 1888年2月に亡くなったその3年後の 1891年2月にイーデイス・アンダーウッド (Edith Underwood) と再婚したギッシングは、この小説の舞台ともなったエクセターに引越し、わずか半年でこの作品を脱稿する。<sup>1</sup> その前年に完成した『三文文士』の成功にしても、この2番目の妻が言わば芸術の女神ミューズの役割を果たしたところがあり、彼としては自身の作家としての将来に明るい希望を見出し始めた頃であった。このような彼であってみれば、ここで自分の過去を清算し、新たな人生の再出発に花を添えようと考えたとしても不思議はない。<sup>2</sup> 問題は、では彼は本当に過去と訣別できたのかという点であろう。以下、言わば自らの分身を創って客観視し、それを葬り去ることによって生まれ変わろうとしたギッシングが抱えていた問題について考察していきたいと思う。

## 第2節 ゴドウィンは突然変異種なのか

学内でも指折りの秀才と呼ばれているにもかかわらず、叔父が学校の近くに喫茶店を出すというだけでゴドウィンが狼狽するのは、彼が本来所属する下層中流階級から抜け出せるのではないかという密かな希望に黄信号が点るからである。<sup>3</sup> 彼が裕福ではない家庭の出身であることは、その着衣や顔色の悪さから窺い知れるというものであり、彼の同級生は、ホワイトロー奨学金受給生である彼の優秀さを知る一方、その友達付き合いの悪さなどからゴドウィンの置かれている経済的状况についてはかなり正確に把握していたと思われる。にもかかわらず、彼は自分の弱みを見せることを極端に嫌がり、衝動的に退学を決めてしまう。<sup>4</sup> このままの成績をあげ続ければ、更に奨学金を獲得して大学進学を果たし、彼の願望が現実のものになる可能性があるにもかかわらず、彼はここでまるで名誉や体面を重んずる上流階級の如き振舞いに及ぶ。まだ13歳の弟に向かって無教養な人々への嫌悪を口にする彼は、実は「自分はあの連中とは別なのだ」と自分自身に必死になって言い聞かせようとしているに過ぎない。低俗で無教養な人々は彼に恐怖を与えるが、それ



は上流階級の人々が感じるような暴徒 (mob) への恐怖ではない。自らのうちに潜んでいるかもしれない「彼らと同質の部分」が目覚めることをゴドウィンは何よりも恐れているのである。

‘I hate low, uneducated people! I hate them worse than the filthiest vermin!’ [..]

‘They ought to be swept off the face of the earth! [..] All the grown-up creatures, who can’t speak proper English and don’t know how to behave themselves, I’d transport them to the Falkland Islands, and let them die off as soon as possible. The children should be sent to school and purified, if possible; if not, they too should be got rid of.’ (40)

ここで、彼が自分を特別の存在であると考えたがっていることの背景について少し考えてみたい。この小説が書かれた頃にはチャールズ・ダーウインの名は既に「家庭の言葉」となり、かつては白眼視された彼の学説である進化論も、その大筋において市民権を得ていた。ダーウィニズムが「突然変異」——環境の激変に対応すべく発生した変種の存在——を理論の一部に含んでいることは、ゴドウィンにとって大きな心の支えになったであろう。自分こそは、より優秀な人々がいる環境にも適応できるように創られた下層中流階級の中の突然変異種なのであり、「自然が生み出した貴族」“an aristocrat of nature’s own making” (41) なのだと思えることは、自分が所属している、本来ならば同類と見なすべき人々に対して彼が嫌悪感を覚えることを正当化する。彼はたとえ親兄弟の絆を切ることになろうとも自らの優秀性を証明せずにはいられない。ただし、それは必然的にこの若者を故郷喪失者 (exile) の立場に置かずにはいないのであった。

卑しい身分の出であるという「過去」を抹殺するために次にゴドウィンがしなければならないのは、自らの社会的地位を安定したものにすることである。化学工場の技師勤めをしている限り、いくらそれが専門的な学識を必要とするものとは言え、亡き父がかつて病院の薬剤師として占めていた地位と変わるところがない。彼がまず目指したのは文筆で世間の耳目を集めることであり、それは「新ソフィスト論」によって叶えられるはずであった。ダーウィニズムが浸透するにつれて、キリスト教の側には、聖書の教義と科学的発見の両方が矛盾しないような新しい理屈が必要となりつつあった。これに目をつけたのがかつてのゴドウィンの好敵手であり、今や英国国教会の若き理論派ブルーノ・チルヴァースである。エクセターに滞在中のゴドウィンに会いに来たこの牧師は、これからは牧師にも科学の知識が必要であることを

とうとうと論じたてる。

‘There is distinct need of an infusion of the scientific spirit into the work of the Church [. . .]. Let us throw aside our Hebrew and our Greek, our commentators ancient and modern! [. . .] What we have to do is to construct a spiritual edifice on the basis of scientific revelation [. . .]. Less of St. Paul, and more of Darwin! Less of Luther, and more of Herbert Spencer!’

‘Shall I have the pleasure of hearing this doctrine at St. Margaret’s?’ Peak inquired.

‘In a form suitable to the intelligence of my parishioners, taken in the mass. Were my hands perfectly free, I should begin by preaching a series of sermons on *The Origin of Species* [. . .].’ (349)

聖職者でありながら、公然とダーウィニズムを支持するような「広教会的発言」をするブルーノは、自分が英国国教会内で一目置かれるためには、このような形で注目を集めることが肝要であることを熟知しており、いわば時流を読むのに長けた日和見主義者でしかない。ゴドウィンはこのような輩の手の内を暴き、その詭弁の愚かさを容赦なく自著の中で攻撃する。この論文を草して溜飲を下げたときの彼は、生まれはどうであれ精神的には「貴族」(かつて弟オリヴァーが兄を称して使った言葉)であることを心の拠り所にする自分が、軽蔑してやまないライヴァルと同様、卑劣なことに手を染めることになろうとは夢にも思わなかったのであった。

自らの論文が『クリティカル』誌に採用される通知が届く直前に、彼はシドウェル・ウォリコムと運命の出会いを経験する。急進派のジャーナリストとして売り出そうとしていた矢先のこの出来事に、自分の筆力に確信を抱ききれないゴドウィンは再び人生の方向を大いに転換させることになる。筆一本で食べていくという売文稼業の厳しさについてはギッシング自身、前作『三文文士』の中で余すところなく書き尽くしていたし、何よりもゴドウィンは、確固たる階級の壁に守られた人々とは異なり、本来所属すべき故郷を捨てた自分が逃げ込むべき場所はもうどこにもないのだということを痛いほど自覚していた。彼はかねてより公言して憚らなかつた「上流階級の女性との結婚」“I am a plebeian, and I aim at marrying a lady.” (140) を実現すべく、英国国教会の牧師の地位を得んとして動き出すのである。ギッシングによってこの場面に込められた皮肉は明白であろう。なぜならば、「目的のためならば手段を選ばない」という点において、ブルーノとゴドウィンは同類項に括られる存在で

あり、ただ前者のみがその試みに成功するのは、その出身階級の違い、そしてそのことに由来する世間の人々の彼らに対する接し方の違いによるもの過ぎないからである。これはリアリズム作家ギッシングの真骨頂であり、その鋭い矛先はこの二人の偽善者だけでなく、他人との交際において、それぞれの所属階級を確認することが前提となる当時の（そして恐らく現代の）読者にも向けられている。

このように、この作品には様々な形でダーウィニズムがその影を落としているが、それはギッシングがこの方面の著作を相当に読み込んでいたからである。その過程で目にした文献のうちのいくつかは実際にこの作品の中に言及されているが、中には主人公の行動規範に大きな影響を与えているにも関わらず、一切触れられないものがある。次に、そのような文献のうちの1つについて検討していきたい。

### 第3節 生まれ (nature) より育ち (nurture) は勝るのか

ゴドウィン・ピークならば当然、そうあってほしいと願うであろうこの問いに対して、ギッシングはどう考えていたのであろうか。ルソーが1762年に発表した『エミール』(Émile)の中で、子どもが育つ環境がその子の人格形成にいかにか大きな影響を及ぼすかについて自説を展開して以来、人の性格を決定するのは「生まれ」か「育ち」かというテーマは、近代教育思想のみならず発達心理学やロマン派文学における子どものイメージにまで発展していった。自然状態における人間教育の理論と方法を論じたものとされるこの書物は、しかしながら、同時に人間の叡智の結晶である科学技術の発達によって農村が荒廃し、手つかずの自然が失われて行きつつあった時期に世に問われたことを思い出さなければならない。

18世紀半ば以降、世界に先駆けて産業革命を達成したイギリスにおいて、科学は言わば神の託宣の如き権威で以って人々の思想や行動に影響を与えていたことは、今更指摘するまでもないことであろう。19世紀は優れて科学信仰の時代であり、それはこの小説に描かれているようなキリスト教への関心の低下、聖書の権威の衰退と軌を一にしていたことも明らかである。しかし、そのように現われた「科学」の中には、今日のわれわれから見れば首を傾げざるを得ないようなオカルトがあったものや荒唐無稽なものも多く含まれていた。たとえば骨相学 (phrenology)、優生学 (eugenics) などといった、今日でもその発想の根幹が残っているものや、動物磁気 (animal magnetism) と

も呼ばれた催眠術 (mesmerism), 自然発火 (spontaneous combustion), 降霊術 (séance), 心霊学 (spiritualism) などである。<sup>5</sup> そのような書物の1つに、1873年に出版された『心理学的遺伝』(*L'hérédité psychologique*)がある。遺伝は個人の所属階級の指標となるような行動を人にとらせるものであるという趣旨を持つこの本を、ギッシングは『流謫の地に生まれて』の執筆を開始する1年半前に読み始めている。<sup>6</sup> そこで彼が知ったことは、それぞれの階級には遺伝によってもたらされる特定の特徴があり、それは教育が人の能力に及ぼす力よりも根強いものであるという考えであった。もちろん、仮に生まれが卑しくとも、育て方によってはある程度的人格向上、能力改善が見込めるとも読めるこの考え方を作者がどこまで信じたのかは確認できないが、その知識はゴドウィンの人物造型の中に生かされている。弟オリヴァーがミュージック・ホールで仕入れてきたと思しきダンスを得意気に披露するのを見て、彼が自分の最も嫌うタイプの人間になっていくことを懸念するゴドウィンは、教育によって人の中にある遺伝性向は変えられると言い聞かせる。すなわち、彼は「生まれ」よりも「育ち」が勝ると言いたいのであり、努力によって人は変われると信じたのである。

‘Do you mean to say I am like uncle?’

‘I mean to say that, if you are not careful, you won’t be the kind of man I should like to see you. Do you know what is meant by inherited tendencies? Scientific men are giving a great deal of attention to such things nowadays. Children don’t always take after their parents; very often they show a much stronger likeness to a grandfather, or an uncle, or even more distant relatives. Just think over this, and make up your mind to resist any danger of that sort.’ (65–66)

このように弟を叱咤激励するゴドウィンは、しかしながら、10年ぶりに再会したバックランドに向かって英国国教会の牧師になるつもりであることを告げてしまう。心にもないことを言ってしまった自分の愚かさを責めるために、彼はこのように嘆く。

But he, he who had ever prided himself on his truth-fronting intellect, and had freely uttered his scorn of the credulous mob! He who was his own criterion of moral right and wrong! No wonder he felt like a whipped cur. It was the ancestral vice in his blood, brought out by over-tempting circumstance. The long line of base-born predecessors, the grovelling hinds and mechanics of his genealogy, were responsible for this. Oh for a name wherewith honour was hereditary! (179)

一方で自分こそ本来の階級を抜け出すべく運命づけられた「選ばれた者」であるという自負を感じつつ、他方で自らの卑劣さが先祖伝来の劣った形質遺伝に由来するものと考えてしまうゴドウィンの内部分裂は、彼の行動にしばしば矛盾を引き起こす。自らの優秀性を証明するための第一歩であったはずの学校生活において、身分の低い叔父が店を出そうとすることを忌み嫌った彼が、大学入学を1年後に控えているのにもかかわらず最上級生になれる機会をみすみす棒に振るなどといった行為1つを取って見ても、自身の卓越した能力に確信を持ってない弱さがそのような軽挙盲動に彼を向かわせたことは明白である。また、自分が大学卒業後に聖職に就くことを母親が望んでいることを知りながら不可知論を盾に一切耳を貸そうとせず、にもかかわらずエリカを話し相手に、無名の自分がいかにして論文を売り込むかについて考えながら、彼はふと「自分が牧師だったら」(136)と口にしてしまう。これもまた、彼自身が自己矛盾に気がついていないことの現われであろう。また、マーセラが遺贈してくれた金のおかげでシドウェルに正式に求婚できる立場になった彼は、わざわざその金の出所を明かすような手紙を彼女に書くことで、自分が廉潔の士であることを匂わせずにはいられない。果たしてシドウェルは様々な疑惑に悩んだ末、結果的に自分が本来所属する階級の行動規範に則って生きることを選択し、祝福されない結婚を選ぶなどといったヒロイズムからは卒業し、別れの手紙を書くことになるのである。

このように人生の重大な転機において、2つの相反する選択肢の中から必ずと言っていいほど悪い方を選んでしまうゴドウィンは、無意識のうちに自分で自分の足を引っ張るような真似をしているのだが、何が彼にそうさせるのかは彼自身にも分からないのである。早くに父親を亡くした彼にとっては、良きにつけ悪しきにつけ自らの生き方の参考となるような大人の男性イメージがその内面に欠けているのであり、それゆえに自らの行動を肯定したり否定したりするための基準を確立できずにいるのだと考えることは可能である。ただし、父親のことを記憶から抹殺することで、彼は遺伝的に自分に伝達されているはずの劣った形質と縁を切ろうとしていたとも考えられ、であるとすれば、彼の迷妄はまさしく自らが招いた災いであったと言えることになる。皮肉なことに、「自尊心が高く、頑固で無様な実直さと猛烈な癡癖」(30)の持ち主であった父親と彼がそっくりであることを、エクセターから逃げるように引き上げてきた彼に告げるのは彼の母親であり、それを否定する気力はもはやゴドウィンには残されていなかったのである。ここにおいて彼

は、自らが「選ばれた者」ではなく、父親の階級に代々伝わる劣悪な資質(仮にそのようなものがあつたならばの話であるが)を払拭することが出来なかった人物、自分を白鳥であると信じたい「みにくいアヒルの子」に過ぎなかったことを思い知らされるのであつた。

結局、彼の抱える様々な矛盾は、進化論と遺伝学という当時一世を風靡した2つの新しい科学的知見によって引き起こされたのであり、その意味では彼もまたギッシングお得意のテーマである「境遇の犠牲者」の一人なのである。ただし、ゴドウィン自身がこのような自己矛盾に陥ることの真の理由を知ることなしにこの世を去るのであつて、その意味では彼は幸せだったと呼べるのかも知れない。では、その理由とは何なのであろうか。

#### 第4節 自己欺瞞の罪と罰

かつてE・M・フォスターはそのエッセイ「イギリス国民性覚書」の中で「英国中流階級の本質は偽善である」と喝破したが、<sup>8</sup>その壟<sup>ひみ</sup>に倣うならば、『流謫の地に生まれて』は、ギッシングによる英国中流階級特有の偽善体質の解剖図であると言える。この物語では主人公のゴドウィン、かつての同級生でもあるバックランドとブルーノ師という3人の偽善者が描かれている。言うまでもなく、最も複雑な内面を抱えているのが主人公ゴドウィンであり、逆に芝居の書き割りのごとく薄っぺらで、そのくせ必ずわれわれの周辺にいそうな軽薄才子の典型として描かれているのがブルーノであるが、ここでは貴族出身でありながら急進主義者であるという(すなわち、上流階級に所属していることで社会的地位に不安を覚えずに済むという、いわば安全な「高み」から改革の旗を振るような偽善的人物である)国会議員エリス・ゴドルフィン(Ellis Godolphin)の秘書を勤めるバックランドに焦点を当ててみたい。

化学工場に勤める一方で激烈な反キリスト教思想を抱き続けているゴドウィンが自分の二面性を常に痛いほど自覚し、世間に対する怨念と良心の呵責の板ばさみになって煩悶する姿が描かれるのに対し、後者の二人は自らの欺瞞性について内省するどころか、そのようなものを毛ほども気にかけていないという点で大いに異なっている。そして、彼らのそのような態度を可能にするのは彼らの社会的地位であり、もっと具体的に言うならば、亡き父親の職業から判断して、意識の中では下層中流階級とは言うものの、実際は限りなく下層階級に近いところにへばりつかざるを得なかったゴドウィンに対し、学生時代の彼の刻苦勉励ぶりを是認して鷹揚に友人扱いすらしてやるだ

けの寛大さ(これが偽善以外の何であろうか)を示すことのできる上層中流階級に、バックランドとブルーノが属しているという事実であろう。当然のことながら、ゴドウィン<sup>ゴドウィン</sup>は全ての点で自分よりも恵まれた境遇にいらっしゃるブルーノ<sup>ブルーノ</sup>に対して、嫉妬に裏打ちされた敵愾心を抱き続ける。しかし、それは良い意味でのライヴァル意識などといったものではなく、相手を軽蔑することでは自分の優秀性を確認できない、本質的には負け犬のそれである。バックランドもまたブルーノの中に面白からぬ部分を嗅ぎとってはいるのだが、気障で忌々しい偽善者だとは思っても、その存在自体を否定することはしない。それは恐らくこの青年の中に自分と同質<sup>しじな</sup>の何かを見るからであろう。つまり、自分たちは所詮同じ穴の貉<sup>しじな</sup>であるという共犯者意識であり、彼のブルーノ<sup>ブルーノ</sup>に向ける眼差しには同族嫌悪とでも呼ぶべき感情が込められている。

バックランドは、実在した著名な地質学者ウィリアム・バックランド(William Buckland, 1784-1856)に因んで名前を付けられたことから窺えるように科学崇拜の時代の子であり、信仰の礎である聖書に完全には懐疑の眼差しを向けられない父親の旧弊<sup>きうへい</sup>ぶりを嘲笑し、自らのことを不可知論者であると呼んで憚らない、典型的な進歩派の青年である。しかし、彼がそのような態度を取っても安泰でいられるのは、ひとえに彼が所属する階級が彼を守ってくれているからであり、言わば彼は、彼の雇い主同様、決して負けることのない戦<sup>いくさ</sup>をしているかのような立場にあるのである。そして、そのことをバックランドはうすうす気づいていながら、あくまで表面的には進歩的かつ急進的であることを装う。そのような自己欺瞞的なバックランドであればこそ、表面的にはゴドウィンに友情をこめた態度で接することができ、その一方で彼に対する疑惑の念を密かに維持できるのである。まともな頭脳を持ち、然るべき教育を受けた若者ならば今どき聖職に就く者など一人もいまい(379)と考える彼にとって、学生時代にあれほど明晰な頭脳を發揮していたゴドウィンが聖職に就くことを考えていると口にするなど、全く思慮の外であった。

'There's only one inconsistency in her that annoys and puzzles me,' Buckland pursued, speaking with the cigar in his mouth. 'In religion, she seems to be orthodox. True, we have never spoken on the subject, but—well, she goes to church, and carries prayer-book. I don't know how to explain it. Hypocrisy is the last thing one could suspect of. I'm sure she hates it in every form. And such a clear brain!—I can't understand it.' (173)

密かに思いを寄せている妹の友人シルヴィア・ムアハウスのことをゴドウィンに説明するこの件で、バックランドは、皮肉にも自分にも関わる二つの主張を行なっている。1つはシルヴィアのように頭の良い人間は偽善など行わないはずだという信念、そしてもう1つは、この時代において正統派のキリスト教を信じることなど偽善者のやることだと彼が考えていることである。これは取りも直さず、彼が自分自身を「頭脳明晰にして偽善的でない」と確信していることを示しているのだが、ここではフォースターの指摘にもう少し耳を傾けてみたい。

偽善こそは、たえずわれわれイギリス人に突きつけられる代表的な非難なのである。(中略)この非難は当たっているだろうか。私は当たっていると思う。しかしそう非難するからには、偽善の意味をはっきりさせておく必要がある。「意識的」欺瞞なのだろうか。その点では、イギリス人の罪は比較的軽い。ルネッサンス時代の悪党のような人間は、あまりいないのだ。無意識の欺瞞だろうか。つまり、頭が混乱するのだろうか。その点では有罪だと思う。イギリス人は悪いことをはじめるとき、かならずと言っていいくらい自分を欺く。<sup>9</sup>

「偽善者」の語源がギリシャ語の *hypokritēs* (演技者) に由来することを指摘するまでもなく、バックランドは自分より下の階級出身の元同級生に真正の友情を抱いているような演技がいつまでもできるような人物ではない。ロンドンにいた頃のゴドウィンがどのような人々と交際していたかを秘密警察を使って調査するという、いかにも政治家秘書ならやりかねないような手段でこの友人の正体を探ろうとしたことを父親に咎められた彼は、ゴドウィンに対する不信感をはっきりと表明し、寛容になることを逆に勧められる。そのときのマーティン・ウォリコム氏の殺し文句もまた、頭の良い人間はそんな愚かなことをしないはずだ、という、息子の自尊心を巧みにくすぐる自己満足的な台詞であった。

‘[...] I marvel at the dogmatism of men who are set on overthrowing dogma. Such a position is so strangely unphilosophic that I don’t know how a fellow of your brains can hold it for a moment.’ (236–37)

自分たちは頭がよいのだから他人に対して寛容にもなれるはずだし、偽善などとも無縁であるという、このあまりにも素朴な信念が生み出すものが、恐らくフォースターの指摘する「無意識の自己欺瞞」なのであろう。ゴドウィン



はバックランドの言動に潜むこのような欺瞞性を早々に見抜いており、「新ソフィスト論」の筆者が誰であるかを知り、自分の下宿に乗り込んで来た彼に対しても冷静に立ち回ることができる。そして、手のひらを返したように冷たい態度を取るようになった相手に向かって、手痛い一言を浴びせる。

'I am not at all inclined to plead for justice; one only does that with a friend who desires to be just. My opinions are utterly distasteful to you, and personal motives have made you regard me as—a scoundrel to be got rid of.' (374-75)

個人的動機で自分のことを厄介払いしがっている人間に向かって友情を求めるようなことはしない、とゴドウィンに言われ、自分がこれまで相手に示してきた態度は単なる自己満足のための演技だったことを暴かれた瞬間に、バックランドの仮面は剥がれてしまうのであるが、自分の中の「個人的動機」などと言われても、自らを欺いている彼にはいったいそれが何なのか分からない。そんな彼は帰宅後、シドウェルに向かってゴドウィンのことを諷めるように訴え、食い下がる彼女に向かって決定的な一言を発する。

'[. . .] He has somehow got the exterior of a gentleman; you could not believe that one who behaved so agreeably and talked so well was concealing an essentially base nature. But I must remind you that Peak belongs by origin to the lower classes, which is as much as to say that he lacks the sense of honour generally inherited by men of our world. A powerful intellect by no means implies a corresponding development of the moral sense.' (380)

要するに階級の低い者は、階級の高い者が遺伝的に受け継ぐとされる「恥を知る心」を持たないから信用できない、とバックランドは言いたいのである。ゴドウィンの内面の葛藤を生み出す要素となった「心理学的遺伝」の思想にわれわれはここで再会するのだが、注目したいのは、バックランドによってこの思想が使われるとき、それは「育ち」より「生まれ」が勝るという文脈で用いられているということである。つまり、下の階級の者にとっては自らの努力によっては遺伝的形質を克服して上の階級に食い込むことも夢ではないというふうに読めるこの思想は、上の階級の者に対しては、所詮下の階級の者は生まれつき俺たちの敵ではないと切り捨てる「科学的」根拠を与えていることになる。優生学が人種的優劣を前提とした発想の上に成り立っていたのと同様に、【心理学的遺伝】は階級社会の枠組みを前提とした議論だったのであ

り、そこでは必ず優位に立っている者の立場が「科学的」な根拠に基づいて正当化されるのであった。したがって、仮にゴドウィンがフォースターの言う「無意識の自己欺瞞」に陥っていたとすれば、皮肉なことにそれは取りも直さず彼がバックランド並みの頭の良さを持ち、したがって彼があれほど望んでやまなかった上層中流階級と同じ資質を持っていたことの証であり、さればこそ彼は「選ばれた者」となる資格を備えていたことにもなるのである。

## 第5節 汝再び故郷に帰れず

シドウェルへの思いを一方向的に募らせる日々を送っていたゴドウィンは、彼女と語り合った翌日の日曜日、散歩に出かける。彼がいつも好んで赴く小村に辿り着くと、村の古い教会からオルガンの前奏に続いて賛美歌の合唱が聞こえてきた。それに耳を傾けながら、ゴドウィンは涙を抑えきれなくなる。

A significant feature of Godwin's idiosyncrasy. Notwithstanding his profound hatred and contempt of multitudes, he could never hear the union of many voices in song but his breast heaved and a choking warmth rose in his throat. Even where prejudice wrought most strongly with him, it had to give way before this rush of emotion; he often hurried out of earshot when a group of Salvationists were singing, lest the involuntary sympathy of his senses should agitate and enrage him [ . . . ].

This sensibility was quite distinct from religious feeling. If the note of devotion sounding in that simple strain had any effect upon him at all, it merely intensified his consciousness of pathos as he thought of the many generations that had worshipped here, living and dying in a faith which was at best a helpful delusion. He could appreciate the beautiful aspects of Christianity as a legend, its nobility as a humanizing power, its rich results in literature, its grandeur in historic retrospect. But at no moment in his life had he felt it as a spiritual influence. (300)

田舎の人々が歌う素朴な賛美歌を聞くと感情が高ぶってしまう自分の性癖を「特異体質」「idiosyncrasy」と考えるゴドウィンの発想をどこまで信用して良いものだろうか。彼が、この涙は「役に立つごまかし」でしかないキリスト教を何代にもわたって信じてきた無知蒙昧な善男善女に対する哀れみの心によるものだと自分に言い聞かせるとき、また、あくまでも、精神に対するキリスト教の影響ではなく、それが生み出した諸々のものみに焦点を合わせ

て評価しようとするとき、われわれは彼が何から目を背けようとしているのか、そのものの正体を推測してしまう。おそらくそれは、なまじ進歩的な気性と優秀な頭脳を持っているが故に時代の最先端を行くような(疑似を含む)科学思想にも通暁してしまい、結果的に今やキリスト教を本心から信じることができなくなった彼自身の姿なのである。そしてそれはまた、その知識によって振り回されたあげくに、自分が本来所属すべき階級の人々に対しては嫌悪感を覚えるようになり、その一方で、自分が所属したいと願う階級の人々の偽善性に気づき、尊敬できなくなっている自己分裂した姿でもあろう。要するに、彼は帰依すべき心の拠り所としての信仰を失っただけでなく、自らの安住すべき場所をも失ったのであって、今や文字通り流浪の民の身の上になったことを認めざるを得ない。仮にシドウェルとの結婚がかなったとしても、恐らくゴドウィンに疎外感に終生悩まされたであろうし、一方マーセラの申し出を受け入れて彼女と結婚していたとしたら、元の階級にとどまってしまうことへの後悔を生涯引きずり続けたであろう。今や彼はどこにいても居心地の悪さを感じずにはいられない体質になってしまったのだ。

ギッシングがこの小説を書くことによって達成しようとしたのは、理知的であるがゆえに大きすぎる理想を自らに課し、矛盾する思想に翻弄されたあげく、遂には自らの居場所を失ってしまうような人物を象徴的に抹殺することで、いわば悪魔祓いを行なうことだったのではないと思われる。売春婦ネルに対する同情から始まった自分自身の転落そして不本意なままの最初の結婚生活が、別居中の妻の病死という形でピリオドを打たれたとき、自分の学費1つ満足に払えないような人間が墮落した女を救おうとすることがいかに自己欺瞞に充ちた行為であるかを彼は認識したはずである。したがって、無産階級の出身である2番目の妻イーディスに求めたのは家庭生活の慰安と肉体的満足のみであった。1891年に出版した『三文文士』は批評家から好意的に迎えられ、ほどなく長男が誕生する。やっと自分にもささやかながらも安定した日々が訪れたことを実感したギッシングが試みたのが、自分の分身とも言うべきゴドウィン・ピークの成功と失敗を客観的に描き、その姿を反面教師とすることだったのである。

果たしてギッシングがその試みに成功したかどうかはわれわれの判断すべき問題ではない。過去と訣別することを意図した作品を書くことで、彼は忌まわしい自分自身の過去を封印することができたと感じたのかも知れない。しかし、切り捨てたはずの過去は思いもかけない形で彼に復讐する。<sup>10</sup> 最初の

妻から罹患したと思われる肺疾患を発症したことに加え、2番目の妻も精神異常を来し、入院生活を余儀なくされる。晩年に知り合った知的なフランス女性との同棲生活は、一方で彼の経済状況を逼迫させ、健康状態を更に悪化させる原因となる。このように、表面的には幸い薄い人生を送った彼であるが、それは結局彼自身が求めた結果でもあったのだ。自身が不可知論者であり、「旧弊な価値観からの脱却こそが知識人の証である」と考えていたであろう彼にとって、その信念を偽ることだけはできなかったのである。仮に貧困に喘ぎ、<sup>しゅくあ</sup>宿痾となった肺充血に苦しみ、異国の地で倒れ伏そうとも、自分自身は知的な「選ばれた者」であるというほとんど信仰にも似た確信がギッシングにはあり、それすらも失うことは耐え難いことだったに違いない。なぜならば、それこそが帰るべき場所を失った彼が唯一頼ることの出来る心の拠り所であり、かつ決して失われることのない永遠の故郷、前途有望な学生としてオーエンズ・カレッジで輝かしい未来を夢見ていた青年の日々の記憶に繋がるからである。

## 註

テキストは George Gissing, *Born in Exile*, with a new introduction by Gillian Tindall (London: Hogarth, 1985) を使用した。

- 1 1891年3月5日付けのベルツ宛書簡の中で、この小説は“Raymond Peak”という表題で初めて言及される。そのわずか半年後の9月21日にはこの小説の買い手が付かないという内容の手紙をギッシングはベルツに送っている。Letters 4: 275, 327.
- 2 たとえばディケンズは *Oliver Twist* (1838), *David Copperfield* (1850), *Great Expectations* (1861) と、ほぼ10年ごとに自伝的要素の強い作品を発表しているが、出版が後になる作品ほど幻滅感を漂わせるようになる。作家にとって過去の経験は良くも悪くも創造力の源泉であろうが、彼の場合は生涯、幼少時の心の傷を舐め続けなければならなかったようである。
- 3 Gillian Beer, *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot, and Nineteenth-Century Fiction* (London: Routledge, 1983) を参照のこと。ヴィクトリア朝文学とダーウィニズムとの接点を論じながら、ジリアン・ビアは、登場人物の階級の低さが重要であると指摘する。
- 4 大石俊一『奨学金少年の文学——ジェントルマンとアンチジェントルマンの狭間で——』（英潮社新社、1987年）は、奨学金をもらうことによって上流階級向けの学校に通うことが可能になった下の階級出身の英才児が味わった悲哀につ

いて書いていて興味深い。リチャード・ホガートは下層階級の人々の識字能力が向上するに伴って彼らが都市文化の一翼を担うようになっていく様を描き出しているが、なまじ支配者側と同じ土俵に上ったがために、彼らが様々な形で屈辱を舐めさせられたであろうことを指摘する。(Richard Hoggart, *The Use of Literacy* (New Brunswick: Transaction, 1992))

- 5 優生学については、ナチスのユダヤ人排斥の根拠にされたことでわれわれの記憶に新しいが、この発想は未だに西洋人の中に根強く残っていると思われる。筆者が滞英中の1995年秋、新聞や駅のポスターなどに登場した人種差別反対を訴える意見広告では、全く同じ大きさの人間の脳の写真が3つ並べられ、その下には“European,” “Asian,” “African”と書かれてあり、それらの脳よりも二回りほど小さい脳の写真の下には“Racist”と書かれていた。筆者を戦慄させたのは、意見広告に脳の写真を使うグロテスクさというよりも、脳のサイズの大小などというステロタイプで「頭の良し悪し」を論じられると相も変わらず考えている彼ら西洋人の発想法であった。人種差別を攻撃する彼らは、それと同時に優生学をその議論の補強材として使ってしまうのである。差別主義者＝頭の悪い人間、という図式がマーティン・ウォリコム氏の発想にも見られることに注意したい。また、靈魂の不滅を信じる心靈術については、シャーロック・ホームズの著者アーサー・コナン・ドイルをはじめ、多くの科学者が関心を示した。ジャネット・オッペンハイム『英国心靈主義の台頭』和田芳久訳(工作舎, 1992年)
- 6 Robert Selig, “Gissing’s *Born in Exile* and Theodule-Armand Ribot’s *L’heredite psychologique*,” *Gissing Journal* 32.4 (1996): 1-10.『心理学的遺伝』という書物の内容については、セリグの論文に全面的に負っている。ただし、本論文における筆者の議論はセリグの主張とは異なることをお断りしておく。
- 7 林道義『父性の復権』(中公新書, 1996年)以降、「父性」という言葉で語られることが昨今は多い。
- 8 「イギリス国民性覚書」小野寺健編訳『フォースター評論集』(岩波文庫, 1996年) 65.
- 9 同書 78-79.
- 10 ディケンズは最も自伝的と言われる『デイヴィッド・コパーフィールド』を書く直前の「クリスマス物語」として *The Haunted Man* (1848) を発表するが、それは悪魔と取引きをして過去の辛い記憶を抹殺しようとした主人公が、楽しい記憶までも喪失してしまい、結果的に過去を受け入れることで人間関係を回復させるという物語であった。ディケンズは過去を切り捨てることの困難を知り、自伝的な作品へと昇華させることを選んだのである。

(金山亮太)